
研究創案ノート

神は細部に宿り給うか？

— 地域研究における「細部」と「具体」 —

木村大治*

Does God Dwell in Detail?: “Detail” and “Concreteness” in Area Studies

KIMURA Daiji*

How microscopic details should be collected and analyzed has often been discussed in area studies. Having studied the social interaction of farmers and hunter-gatherers in Africa, I believe the aphorism often quoted by German art historian Aby Warburg, “God dwells in detail” can be applied to area studies. Through the detailed description of social interactions, analysis can be broadened to many kinds of problems in the area. There are, however, certain conditions that make the study of “details” into area studies. One may be to collect data which are not only “true,” but also “interesting”; and another is to position them correctly in the context of current academic interest.

1. バカ・ピグミーの村で

私はいま、アフリカ・カメルーン東南部の熱帯雨林の中にある、バカ・ピグミーの村でこの原稿（の最初のバージョン）を書いている。外から子供たちが遊んでいる声が聞こえてくる。女が大声で誰かを呼んでいる。少し離れたバンジョ（*mbanjo*; 集会小屋）で、男たちがぼそぼそと語りあっている。昼の日中、村はずれの家の中に座っているだけで、声を介しての知覚は村の中心までも広がっている。バカ語がまだそれほどできないので、言っていることの一部しかわからない。しかしかれら自身にしてみれば、かすかに聞こえる発話でさえも、その内容を理解することは難しくないはずだ。—このような音声的環境の広がりの中で、バカの人々はどうのような経験世界を生きているのか。そしてそれが、かれらの社会生活とどのように関係しているのか。こういったことが、いまの私の関心事である。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

実際どのようなデータを取るかというと、それは実に細かい事柄である。そのひとつ、人々の会話をビデオに撮って、それを一語一語できる限り忠実にトランスクリプション（転記）をおこない、翻訳する。しかし日常会話というものは、文法的でない文、言い直し、あまり意味のない指示詞や間投詞等が頻発し、そのまま読んでにもわからず理解できないことが多い。また、ひとつの発話でさえも、それを十全に理解するためには膨大な背景知識が必要なことがある。われわれ自身が日本語の会話をトランスクリプトする場合でさえそうなのだが、相手は私がまだ十分に習熟してないバカ語である。一文を理解するのに数十分かかることも希ではなく、「フルヘッヘンド」を「うずたかい」と訳すのに半日かかったという、解体新書の翻訳の苦勞が我が身に感じられてくるのである。¹⁾

こんな調査もやっている。村の中で、どの時間にどのぐらいの頻度で発話が聞こえるかを知するために、15秒に1回、1秒間耳を澄ませ、耳に入る発話の数とその種類（男の声か女の声か子供の声か、大声か小声か、相手を特定しているか特定していないか）を記録するのである。1回のセッションで20分程度続けて記録をおこなうと決めているのだが、夕方、村中が声であふれかえる時間帯では、10分もやれば神経がぐたぐたになり、「もういやだ」と思ってしまう。今回通算約30時間この作業をおこなったのだが、最後には肩が凝って口内炎が7つもでき、満足にものが食べられなくなってしまった。

2. 「神は細部に宿り給う」

以前、アジア・アフリカ地域研究研究科のゼミで、こういった研究の一部を発表したことがある。その時、ある教官から次のようなコメントがあった。『「神は細部に宿り給う」というけれど、やはりこのような細かい仕事をしているのを見ると、これが地域研究になるのか、ということが気にかかる」。そのころ研究科は立ち上がったばかりで、「地域研究」という名のもとにどのような方向性で研究を進めていくのか、模索の時期であった。こういった議論がでてくるのは自然であつたろうし、私もある程度予期していたことでもあつた。そして「神は細部に宿り給う」という言葉は期せずして、私自身が心の中でつぶやいていた言葉だったのである。²⁾

私が人類学のコンテクストでこの言葉に出会ったのは、学部生時代、地名研究で知られる

-
- 1) ここでやろうとしているのは、エスノメソドロジーの一展開としての「会話分析 conversation analysis」の枠組みを民族誌記述に適用するという試みであるが、そこにはいくつかの本質的な問題が随伴している。詳細については〔木村 2001〕を参照されたい。
 - 2) ここではタイム・サンプリング法という、計測的・数量的分析法を紹介したが、こういった方法論のみが「神の宿る細部」に至る道であると主張しているわけではない。私の基本的な立場は、読者に迫力をもって事象が提示できるのであれば、現象学的（文学的？）手法でも、マクロな分析でも、数量的方法でも、こだわらず使えばいい、というものである。たまたまこの調査の場合は、村の中に満ちる声という、文章で書けばそれだけの記述に終わってしまう、そして録音して提示することも技術的に困難な対象であつたので、15秒に1回のサンプリングという手法を取つたのである。

民俗学者、谷川健一氏の同名の著作〔谷川 1980〕を手にしたときであった。つけかえ可能なレッテルにすぎないかのようにみなされ、次々と失われていっている地名が、いかに重要な多くのことを伝えている遺産であるかということについて、この本では詳しく論じられている。そしてドイツの美術史家アビ・ヴァールブルグ (Aby Warburg) の好んで使ったという格言「神は細部に宿り給う “Der liebe Gott steckt im Detail (The good God dwells in detail)”」を、谷川氏はその著作の表題としたのであった。当時、人類学に心を傾け始めていた私が、強い影響を受けた本である。

さて、私はゼミのディスカッションで、次のように答えたと記憶している。「人々が日常、どのようなインタラクションをおこなっているか、そしてそれがどのような印象を与えているかということをきちんと記録し、分析することは、アフリカの人々というものを理解するうえで、他のディシプリンに勝るとも劣らない重要性を持っていると思う。自分はそう考えて仕事を続けている」。

実際われわれは、フィールドに赴き、土地の人々と長く生活を共にしていると、その人たちの話し方、身振り、交渉やけんか、そういった事象に日々どっぷりと浸かることになる。そしてそのような印象は、同じフィールドに行ったことのある仲間のあいだでは、「そうそう、そうなんだよね」といった形で多くを共有しあえるものである。しかしそれを記載・分析しようとした時点で、われわれはいくつかの困難に突き当たってしまう。そういった記載を「主観的な印象の吐露」より上の段階に持つていくための体系は、いまだ十分に整備されているとは言えないし、さらにその奥には、異文化を理解するとはどういうことか、そしてそれは原理的に可能なのか、といった深刻な問題が横たわっている。³⁾

こういった状況をどうするのか。私に人類学全般にわたっての確たるの見通しがあるわけではないが、私は自身の研究を以下のように位置づけている。

近年のインターネット、携帯電話といった新しいコミュニケーション形式の登場によって、

3) もちろん日常的な相互行為の分析は、言語に関しては社会言語学やエスノメソドロロジー・会話分析、さらには近年の機械翻訳・音声認識研究において、表情・身振りはキネシクス、ジェスチャー研究において、身体の位置取りはプロクセミクスにおいて、それぞれ研究がなされてきた。これらについていちいち論評する紙幅はここにはないが、私が不十分だと感じている点をいくつかあげてみよう。

- ・社会言語学は、前提とされた社会構造の「裏打ち」としての言語現象を記述すること（たとえば、前提としての社会階層があって、それを表現する敬語を分析する、といった）に重点を置いており、真にインタラクション的な現象を捉えようとしていないように見える。
- ・エスノメソドロロジー・会話分析は、おもに研究者自身の属する社会（たとえば、アメリカ中産階級）を中心とした研究であり、正面から異文化を対象としたものは少ない。また異文化を対象とした場合でも、エスノメソドロロジー特有のジャーゴンを従来の手法に被せただけであり、「それがなくても記述できるのではないか」という印象を抱かせるものが多い。
- ・キネシクスやプロクセミクスは、初期の伸びやかな記載の時期を過ぎると、「分類の迷宮」に入り込んで活力を失ってしまったかのように見える。

日常的な相互行為の形態そのものが大きく変化してきている。その結果、我々の「共に在る」という感覚の基底はゆらぎ、哲学、認知科学、社会学、計算機科学といった諸分野において、相互行為の分析は中心的なテーマとなりつつあるのだが、そういった研究の基盤となる理論（[シャノン流の] 情報理論、言語行為論、会話分析、語用論等々）は、人類学者の目には、西欧的なバイアスを強くうけた狭小なものとして映らざるを得ないのである。私がアフリカで見た相互行為の様式は、そういったバイアスを感じさせるのに十分な驚きを与えてくれた。その異質で豊穡なコミュニケーションを記載することによって、既存の諸理論に対するカウンターとすること、これが私のまずもっての目標である。

一方、「自分たちのやり方」に対する「異なったやり方」を提示する使命を持っていたはずの人類学において、相互行為研究は近年むしろ下火である。先に述べたように、フィールドに入った人類学者の気づく、土地の人々の異質な関係のとり結び方を記載するための言葉は、いまだ十分とは思えない。このような、現象の記述と分析枠組みの建設、双方が互いを必要としているが共に未成熟であるという悪循環の一端にくさびを打ち込み、相互行為の「面白さ」をあらわにしてゆくにはどうすればよいか。私が日々思いめぐらしているのはそういうことである。

3. 地域研究と「細部」

さてしかし、そういった研究がなぜ「地域」研究と呼ばれうるのか。その点についてももう少し書いておかねばなるまい。実際「それって地域研究なの？」という問いは、その名を掲げて研究を進めるものたちが、他者に対して、そして自らに対して、頻繁に投げかける疑問なのである。

まず問題となるのは、「地域研究 area studies」という名称の解釈である。「地域研究とは何を研究することなのか？」という問いに対しては、とりあえずは次のように答えることができるだろう。「それは地域です」。

国語事典（三省堂「大辞林」第2版）によると「地域」の説明は以下のようである。

1. 区切られたある範囲の土地。
2. 政治・経済・文化のうえで、一定の特徴をもった空間の領域。全体社会の一部を構成する。
3. 国際関係において一定の独立した地位を持つ存在。台湾・香港など。

1 番目は非常に原義的な説明であり、3 番目は「国と地域」というコンテキストで使われる用法なので、「地域研究」を論じるときに問題となるのはほぼ 2 番目の意味であるといっていよう。とりあえずは「空間性」が定義の中心となっているように見えるが、よく考えてみれ

ば『『一定の特徴をもった』空間の領域』というのは、とても多義的な言い方である。「一定の特徴」とは何なのか。その決め方によって、「地域」はいかようにも変形しうるだろう。「地域」「を」研究する、ということになると、地域というものが手に触れられる何らかの実体として存在する、という感が強くなってしまう。しかし、「地域」とは、それ「を」研究する、といった形で目的語の位置に置きうる対象ではなく、いわばさまざまな事象がインタラク션을起こす「場」なのである。そして、研究されるべきは、実はそのインタラクションなのではないか、と私は考えている。

バカの発話という「細部」に私はこだわっている。しかし発話のトランスクリプションをおこなっていて、そこに現われてくるのは、たとえば以下のような、多様な事象である。

- ・バカと近隣の農耕民バクウェレとの間の微妙な社会関係。かれら同士は対面的にはごく平和につきあっているのだが、バカ同士の会話のトランスクリプトには、「バクウェレは悪い」「バクウェレはうるさい」といった悪口が頻繁に登場する。現実には、そのどちらの態度が「表」で、どちらが「裏」だ、といえるような単純な状況ではない。
- ・バカの青年期における社会化のプロセス。私のビデオには、集会所にひとりで座って、自分の息子への愚痴を延々と大声で語る男の姿が記録されている。「(息子の)ベケルはいつまでも遠くの村をふらふらしていて、家に帰ってこない。母親は病気なのに」。しかし青年期に、そのように村々を渡り歩くのは、かれらにとっての配偶者探しの重要なプロセスらしい。
- ・自然・環境に対する関心の向け方。バカのにぎやかな会話の中には、次のような話題が頻繁に登場する。森で大豊作のフェケ (*feke*; ブッシュマンゴー) の実を取ってきて、それを食べたら汁で服が汚れたという笑い話、獲物の肉を自分に分けてくれないかという話、遠くの森に行って、どんなにたくさんの蜂蜜を取ったかという話、サファ (*safa*; 野生のヤマイモ) が「畑に植えてあるように」たくさん取れる森の話。
- ・バカ社会と外部世界との関係。村にブルドーザがやってきて、橋を直し、道を広げることについての論評。WWF (かれらは「ドビドビ」と発音する) の人たちが狩猟を制限しようとすることに対する文句。

ここにあげたのは、私が起こした短い会話セッションの中に登場する、ささいな事例にすぎない。しかしその中にさえも、この地域で起こっている実にさまざまな事象間のインタラク

ションが見て取れる。そこからいろいろな方向に話が広がっていきそうである。

こういった豊富な民族誌的データも大変に面白いのだが、私の興味の中心は、かれらバカ・ピグミーの社会的インタラクションの形態そのものにある。詳しいことを書く紙幅はここにはないが、かれらの発話や行動における極端な共鳴性、インタラクションの「柔らかさ」、そういった現象は、以前研究していたバントゥー系農耕民とも、そして我々日本人ともきわだって異なるものである [木村 2000; Kimura 2001]。現在、会話を中心とするインタラクションの研究は、言語学や社会学だけではなく、認知科学、人工知能研究といった分野でも大きく盛り上がりを見せているが、バカの会話構造の事例は、そこにある種のインパクトを与えるのではないかと考えている。

私の場合、会話という細部から網の目を広げていくことによって、バカという人々のいる場の事情がだんだんとわかってくる。そしてそこに生起するさまざまな現象の間の相互作用を、特定のディシプリンにこだわることなく記述していくプロセスのなかで、おのずから関心の空間的・時間的広がりが出てくる。それが跡づけるに、(私なりの)「地域研究」と呼ばれることになるのだ。そう考えている。

4. 「具体」の記述

神は細部に「も」宿ると考えるので、上のように書いたのだが、しかしそれが真に宿りうるためには、いくつかのハードルが存在するだろう。以下この問題について、私自身の経験をいくつか述べてみたい。

私が最初に人類学のフィールドワークをおこなったのは、京大理学部・人類進化論研究室の修士課程に入学したときだった。当時はアフリカで調査をおこなうのは博士課程に入ってからで、修士時代は国内の調査で経験を積み、修士論文をまとめるというのが通常のコースだった。いろいろ迷ったあげく調査に入ったのは、鹿児島県トカラ列島の一小離島だった。その近くの島には、学部生時代に野生化牛の調査で訪れたことがあったのだ。学部2回生まで数学を志望していた私は、旅行にさえもあまり行ったことがなく、小さな島の共同体でおくことはみな新鮮だった。最初の何度かの調査で見聞きし、感じたことをまとめて、M1の終わりにゼミで発表した。しかし結果は惨憺たるものだった。だんだんと参加者の注意が散漫になり、あくびをする人も出てきた。一番こたえたのは次のような批評だった。「そんなこと、日本の田舎に行けばどこでもあることじゃないの？」。

私には面白く思えた事実は、フィールドワークの先達たちの目には「あたりまえのこと」としか映らなかった。それはせいぜい私自身の経験の少なさ、勉強不足、そういったことの反映でしかなかったわけである。私は落ち込み、しばらく研究室に顔を出す気にもならなかった。人を面白がらせるにはどうすればよいのか。何とかしなければ、と思い定め、M2の夏にもう

一度フィールドに渡った。突破口になったのは、「誰と誰と一緒にいて、何かをしていた」というデータだった。飲み会、集落の共同作業、釣り、島の小社会においてはそういった集まりが日々頻繁に形作られる。その集まりの構成のしかたに、この社会の特徴が強く反映されている、そういう印象をもっていたのだが、それを具体的な形で示す必要があった。私自身が集めたデータと、以前この島で調査をした東大の人類生態学の人たちからもらったデータをあわせて分析すると、なんとかものが言えるようになってきた。修士論文〔木村 1987〕の中核となるストーリーが浮かんできたのは、修士研究の発表の日の朝、こたつの中でぼんやりと、描き上げたソシオグラムを眺めていた時のことだった（危険なのでまねしないでください）。

けっきょく私が未熟だったのは、ある（自分にとって）新奇な「地域」に出かけて、そこで見たことを記述し、それだけで研究になると思ったという点、そして、何がいまの学問的状況のなかで問題となっていることなのか、という知識を持ち合わせてなかったという点にあったといえるだろう。私のゼミ発表は、間違った事実を述べていたわけではない。しかし「正しい」記述と「面白い」記述は違うのである。—こういった状況は、フィールドワークのトレーニングを始めた人にとっては、かなり共通した体験ではないかと思う。「そんなこと、どこにでもあることじゃないの？」「で、何が面白いわけ？」そういったコメントに突き落とされ、そこからはい上がってはじめて、人はフィールドワーカーになるのだ。

地域研究においては、これはとくに注意しておいていいことだと思う。というのは、「地域研究」という言葉に引きずられ、自分がある「地域」に来ているということに安住し、そこで見た現象をたんに記述するだけで研究ができてしまうという錯覚に陥りやすいからである。

このように、ただ単に「具体」を記述しただけでは、仕事にならないことが多い。しかし急いでつけ加えておかねばならないのは、地域研究から「具体」を取り去ってしまったら、そこに残るのは空疎な議論でしかないだろう、ということである。具体のもつ力について考えるときいつも思い出すのは、昨年亡くなられた伊谷純一郎先生の話してくれたエピソードである。詳細は覚えていないが、ハワイかどこかで老化に関するシンポジウムが開かれ、伊谷先生も招待されたのだそう。そこで「禿には男性ホルモンが強く関与している」という発表がおこなわれた。「そのとき俺がさっと手を挙げて『チンパンジーは雌が禿げるで』言うたら、そいつはぐっと詰まりよってな」、伊谷先生は笑いながら話していた。おそらく人間の禿には男性ホルモンは関与しているのだろうし、伊谷先生もそう思っていなかったわけではないだろう。しかしその発表の場において、「雌が禿げる」という、チンパンジーに深く関わった研究者でしか知らないであろう事実は、発表者の言葉を詰まらせる強い力を持ったのである。その事実を議論に取り込むには、チンパンジーと人間のホルモン系の働き方が違い、あるいは毛根細胞の感受性が異なり、といったさらに多くの事実をもって対抗しなければならないからだ。「でも、あそこの人たちはこういうことをしとるで」、そういった具体の提示は、百万言の議論をひっ

くり返す、フィールドワーカーの最大の得物なのだ。

5. お わ り に

「神は細部に宿り給う」という言葉を糸口として、地域研究をめぐって日頃考えていることを、あまりまとまりなく書きつづってきた。ここで書いたのは、研究科に入学してきた人たちに、講義や茶飲み話の席でよく話している事柄である（しかしいくら口で話しても、自分でやってみないと結局は身につかないのだろうな、ということもいつも思っている）。自立した研究者にとっては無用な説法だったかもしれない。

ここで述べたクリティークの矢は、もちろん私自身にも返ってくるものだということを自覚しつつ、面白い現象を捉まえ、それを人にも面白いと思ってもらう、そういう仕事をしていきたいものだと考えている。

引 用 文 献

- 木村大治. 1987. 「小集団社会における『集まり』の構成—トカラ列島の事例—」『季刊人類学』18(2): 172-216.
- . 2000. 「拡散的会話場と相互返照的预期」岡田美智男・三嶋博之・佐々木正人編『bit 別冊身体性とコンピュータ』共立出版, 233-245.
- . 2001. 「『語る身体』の民族誌—ブッシュマンの生活世界 (1) 」「『会話の人類学—ブッシュマンの生活世界 (2) 』(菅原和孝著) 書評」『アフリカ研究』58: 95-98.
- Kimura, D. 2001. Utterance Overlap and Long Silence among the Baka Pygmies: Comparison with Bantu Farmer and Japanese University Students, *African Study Monographs, Supplementary Issue* 26: 103-121.
- 谷川健一. 1980. 『神は細部に宿り給う—地名と民俗学』人文書院.